

言語景観による地域の活性化—大分県での事例—

Revitalization of Community by Linguistic Landscape in Oita Prefecture



Bao Lianqun (包聯群)¹

¹ Professor, Faculty of Economics, Oita University

公共空間に掲出されている案内、看板、標識などに用いられる言語表現を「言語景観」と呼ぶが、本稿では大分県の国際観光都市・別府を舞台に、その改善に取り組んだ長期にわたる実践的研究の成果を報告する。

Abstract

“Linguistic landscape” is roughly defined as written language (such as signs, warnings, tourist information and so on) displayed and shown in public places. While the basic purpose is for the sake of tourists/visitors, both foreign and national, the linguistic landscape tells us a lot about the cultural backgrounds of the local community. It also plays an important role in promoting inbound tourism and in revitalizing the local economy through multilingual services.

This paper is based on several field studies we conducted in the famous *onsen* (hot spring) resort of *Beppu*, Oita Prefecture, Japan, in collaboration with local authorities and tourism associations. Beppu enjoys many incoming (especially Korean and Chinese, along with Western) tourists, but we found erroneous words, inadequate words and mistranslations in signs and boards there. In some cases, there are no explanations in foreign language. Therefore we made some suggestions for improving the linguistic landscape of Beppu. For example, we edited and produced a Chinese language version of a tourist booklet on popular destinations there. This has contributed to the revitalization of the community, nurturing the healthy multilingualism and multiculturalism.

Keywords linguistic landscape, language service, inbound tourism, multilingualism, multiculturalism

1. はじめに

1.1. 言語景観とは何か

言語学界において、言語景観は、「公共空間で目にする書き言葉を指している」(庄司博史/P・バックハウス/F・クルマス 2009:9) という認識で概ね一致している。街で「扁額や看板」などに文字が書かれているのをよく目にするが、その風景を「言語景観」(linguistic landscape) と言う。書かれている文字は国や地域によって様々なタイプがあり、それぞれの特徴を持っている。これらの言語景観は言語サービスにもなりうる。例えば、日本において、漢字圏以外の観光客は、お店やレストランの看板が漢字のみで書かれている場合、何のお店であるかを事前に予測できない。もし英語や日本語の二言語で書かれていれば、事前に

情報を得ることができ、観光客の言語面での障害を取り除くことができる。これを「言語サービス」と言い、こうしたサービスを受けた観光客が口コミで友人にお店を紹介したり、日本にもう一度来ることに結びついたりする可能性は十分にあり、「経済効果」(井上・包2015) や地域の活性化にも繋がっていくと考えられる。

1.2. 研究目的

本稿は日本一の温泉県 — 大分県の観光地である別府地獄めぐり温泉と観光経由地の別府駅と大分駅周辺エリアを対象とし、設置されている看板や標識などの言語表記を調査し、大分県における言語景観の実態を明らかにし、地域の活性化に繋がっていくことを研究の目的とする。同時

に、改善すべき点がある場合、その解決策を含めた実践的な研究も行うことにする。

1.3. 研究方法

研究方法として、本稿は先行研究を参照にし、フィールドワークによってデータの収集や現状把握などを行った。そのうえで多言語（文字）景観の問題点を指摘し、それに対する改善策を考え、実践していく方法を取った。そして、多言語（文字）景観による多言語サービスを通して、より多くの観光客を呼び寄せることで、地域の活性化に貢献することを旨とする。

2014年から2019年にわたって別府地獄めぐり温泉を中心に現地調査をし、写真による資料収集を行った。そして、2017年に大分県委託事業：地方創生大学等連携プロジェクト支援事業A「学生における地域ブラッシュアップ」プログラム2017」にも応募し、助成を受け、包ゼミによる調査も実施したことがある。

1.4. 先行研究

井上・包（2015：104-105）によると、言語景観に関する本格的な研究としては正井（1969）が最も早く、言語景観の地理学上のLandschaft、landscapeの訳語として「景観」という術語が使われたという。言語景観に関しては様々な定義がなされており、R. Landry / R.Y. Bourhis (1997:25) と 庄司博史/P・バックハウス/F・クルマス (2009：9)、Long (2011：3-4)、包（2015：90-91）などが見られる。言語景観の定義を厳格にすると、境界領域まで視野を広げることができず、研究の範囲を狭めてしまう恐れがあると考えられる¹。言語景観が果たす役割の一つとして、井上（2011：1-10）は「言語景観は見る人の意識に影響を与え、アイデンティティに作用し、景観と人の相互に、循環的な対話が成立する」と見ており、単に言語サービスの役割を果たすだけでなく、見る人の意識にも影響を与える。上記のように言語景観について多数の研究はあるものの、実践的な活動を行った研究は今のところまだあまり見られ

ない。そのため、本稿は言語景観の研究にとどまらず、実践的な活動を通して、地域活性化への貢献も視野に入れ、それらをまとめたものでもある。

1.5. 本稿の構成

本稿のはじめに言語景観の定義に言及し、研究目的と研究方法などを明確にし、第2節では、研究の背景、即ち、大分県を訪問する外国人観光客が増加しつつある実態、その経緯、動向などを紹介した。第3節では、言語景観の言語の種類と存在する問題点、主に中国語の誤用などを指摘し、改善策を考えた。第4節では、中国語によるパンフレットの作成や公共機関における多言語誤表記についての指摘や改善につながる実践活動を紹介し、第5節のおわりでは、考察とまとめを行った。

2. 大分県を訪問する外国人観光客の動向

2018年に訪日外国人観光客数（総数）²は3119万人に達し、そのうち、アジアからの客数は2675.8万人程度であった。国・地域別にみると、韓国は753.9万人であり、中国大陸は838万人、台湾は475.7万人、香港は220.8万人前後であった。漢字圏からの観光客数は1500万人を超え、全体の半分を占めていることがわかる。

大分県において、近年の統計をみると、外国人観光客の数は増加傾向にある。以下の表1は、平成28年度から30年度までに大分県に宿泊した外国人の国や地域別の人数を表したものである。韓国からの宿泊者は平成28年度の36万人前後から30年度の53.9万人以上までに増加したものの、29年度の56万より2万人程度減少したが、これは最近の日韓の政治動向に影響されたものと見られる。漢字圏である中国大陸からの観光客は平成28年度に6万人を超えていたが、毎年約1万人の勢いで増加する傾向にある。香港も毎年増加しているが、平成30年度は平成28年度より3万人も増え、8万人を越えている。そして、台湾は平成28年度に8.7万人を越えていたが、平成30年度も平

1 言語景観の定義について、包（2015）、井上・包（2015）を参照されたい。

2 JNTO日本政府観光局（平成30年）https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/data_info_listing/pdf/2018_december_zantei.pdf

成29年度同様に10万人を超えていることがわかる。外国人訪問客の中で、漢字圏としての中国大陆、香港と台湾からの来客数は30.9%以上を占めているが、韓国からの観光客は61.4%以上を占めていることがわかる。これは地理的な位置と、大分空港から韓国の仁川まで直行便が運航されていることと関係があると考えられる。

表1：発地別宿泊客数【大分県統計（平成28～平成30年度）】(単位：人)³

発地	H28	H29	H30
韓国	360,601	560,017	539,189
中国大陆	63,020	72,795	82,292
香港	51,580	62,799	81,111
台湾	87,296	102,050	108,598
タイ	20,767	17,459	16,267
その他のアジア	19,750	24,091	25,207
その他外国	15,658	23,083	25,234
外国小計	618,672	862,294	877,898

出典：大分県観光統計調査（ホームページ）より筆者作成。

以下の図1と図2は、平成30年度の数字に基づき、国・地域別の使用言語（文字）を推定したものである。図1からわかるように、大分県において、外国人訪問客のうち、韓国語の使用頻度が最も高く、その次に中国語になることが推測される。言語景観及び言語サービスとしては、韓国語と中国語の需要が英語と同様に重要であることがわかる。図2は使用文字（言語）の予測を示したものであり、観光客を地域ごとに分けてみると、漢字圏の中国語繁体字を用いる香港や台湾の観光客の数が22%を占め、中国大陆の9%よりも倍以上多いが、中国語圏の観光客の多数は繁体字も簡体字も両方とも大体読めると想定できる。したがって、こうして合わせて考えると、中国語圏が凡そ31%以上を占めていると想定してよい。

図1：使用言語（文字）の推定（出典：大分県観光統計調査（ホームページ）を参考にし、筆者作成）。

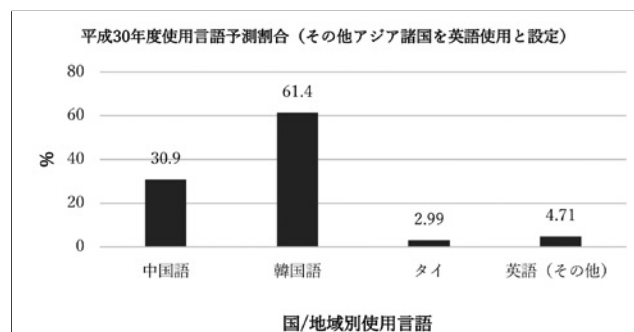


図2：使用文字（言語）の予測割合（出典：大分県観光統計調査（ホームページ）を参考にし、筆者作成）。

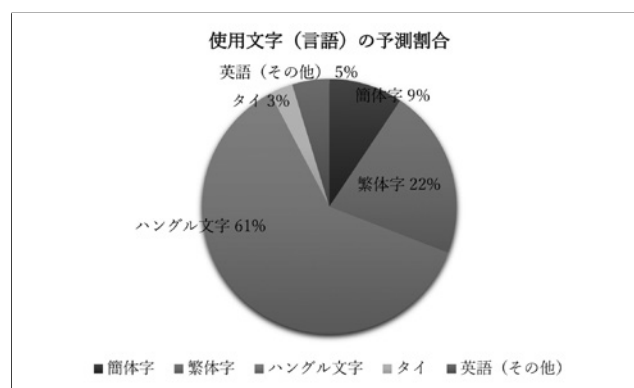


表2は平成28年度から30年度までに大分県の別府市に宿泊した外国人の国や地域別の人数を表したものである。韓国からの宿泊者は最も多く、平成28年度に14万人以上に達しており、大分県全体の外国人観光客の63%以上を占めている。そして、その後も徐々に増え、平成30年度は21万人を越えたことがわかる。漢字圏である中国大陆、香港と台湾からの観光客は毎年増加する傾向にあり、平成30年度の合計は、13.3万人を超えている。そして、平成30年度に別府市に宿泊した外国人観光客は38万人を超え、全体の44%以上が別府市に宿泊していることがわかる。

3 大分県観光統計調査（ホームページ）：<https://www.pref.oita.jp/soshiki/14180/kankoutoukei.html>

表2：発地別宿泊客数【別府市計（平成28年度～30年度）（単位：人）⁴】

発地	H28	H29	H30
韓国	142,701	221,486	219,301
中国大陸	28,377	29,968	39,258
香港	28,369	35,902	47,639
台湾	38,172	41,898	46,421
タイ	14,452	10,071	8,987
その他アジア	6,619	8,392	10,531
その他外国	8,814	9,778	11,976
外国小計	267,504	357,495	384,113

出典：大分県観光統計調査（ホームページ）より筆者作成。

以上の表1と表2より韓国と漢字圏（中国大陸、香港と台湾）からの外国人観光客の半分近くが別府市を中心に活動していることがわかる。これは別府市にある観光地「別府地獄めぐり温泉」の重要性を物語っており、その言語景観及び言語サービスの重要性に注目する必要があると考えられる。

このように外国人観光客の増加に伴い、別府市や大分市などの観光地を中心に多言語表記が増えてきている。大分県は、都道府県別外国人延べ宿泊者数（平成30年度1月～12月）が全国において14位であり、宿泊者数の伸び率も16位である。県内・県外（除く外国人）・外国人延べ宿泊者数構成比は福岡県に次ぐ9位であることが国土交通省観光庁の統計からわかる⁵。こうして、全国だけではなく、九州や沖縄エリアの中でも上位にあがっており、インバウンドの需要が比較的に高くなっているため、大分県の言語景観や言語サービスがますます無視できなくなっていることが明らかになってきていると言える。以下では、大分県における多言語景観の実態を見ていこう。

3. 言語景観の実態

大分県別府市の別府地獄めぐり7箇所、別府駅や大分駅などの観光客が行くところや経由地を中心とし、現地を訪れ、観光地の案内看板やその他の言語表記を対象にし、多言語表記の実態を調査した。多数回にわたる現地調査を通

4 大分県観光統計調査（ホームページ）：<http://www.pref.oita.jp/soshiki/14180/kankoutoukei.html>

5 国土交通省観光庁 宿泊旅行統計調査報告（平成30年1～12月）
<https://www.mlit.go.jp/kankocho/siryou/toukei/content/001312884.pdf>

して、観光客が多く集まる別府地獄めぐり温泉、別府駅や大分駅での多言語表記、特に中国語表記の誤表記が多く、必要とされる情報が正しく翻訳されておらず、言語サービスが行き届いていない実態が明らかになってきた。以下では、その表記言語の種類と中国語の誤表記の具体例を紹介し、改善点を指摘する。

3.1. 表記言語の種類

3.1.1. 四言語表記：日・英・韓（朝鮮）・中

別府地獄めぐり温泉の海地獄とカマド地獄では、図3～図8のように案内板や売店、商品などの案内に日本語、英語、中国語と韓国（朝鮮）語⁶の四言語で表記されている。図4は三言語で表記しているが、日本語の表記は別の看板にて書かれている。



図3：別府地獄めぐり温泉の海地獄



図4、図5：別府地獄めぐり温泉の海地獄

6 本稿では、以下「韓国（朝鮮）語」と表記せず、「韓国語」と省略。

図6と図7は別府地獄めぐり温泉のカマド地獄の由来をそれぞれ四言語で書いてある。また、カマド地獄では、簡単な情報だけを四言語で示し、他は日本語のみで表記している看板もある。例えば、図8の「竜舌蘭」(century plant)はそうである。

近年において、別府駅や大分駅にも四言語で表記するところが増えてきている(図9-図12)。なお、大分駅の看板の主な表記は多言語であるが、注意書きなどの細かい表記は日本語のみで書かれていることもある。一方、別府市に観光施設が多くあるため、外国人の間でもその認知度が高く、表2で示されているように、別府市は外国人観光客の人気宿泊先にもなっていることがわかる。

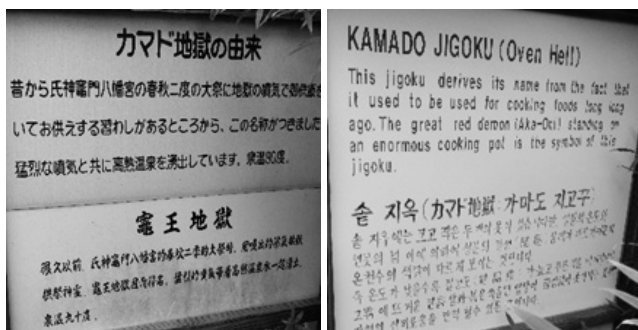


図6、図7：別府地獄めぐり温泉のカマド地獄

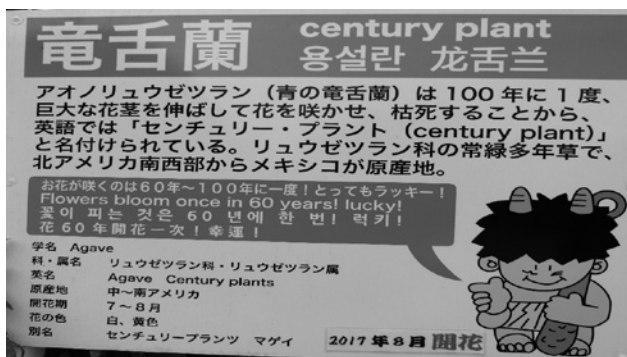


図8：別府地獄めぐり温泉のカマド地獄

別府駅には、地獄めぐりをはじめとする各観光地のパンフレットが用意されている。日本語のパンフレットの他に英語、韓国語、中国語表記のもの(図13-16)が主に置かれており、中国語のパンフレットは繁体字、簡体字の両方に対応しているときもある(図17)。大分駅と比較すると詳細な情報の多言語表記が多く、バス乗り場の地図や注意喚起ポスターには英語、韓国語、中国語が表記されていることがよく見かける。



図9：別府駅の多言語表記看板



図10：大分駅の多言語表記看板

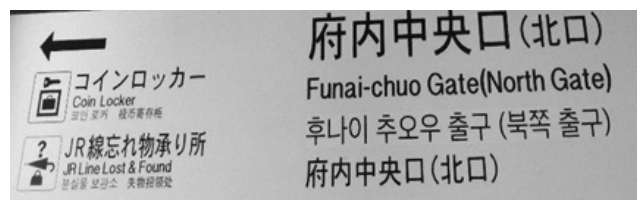


図11：大分駅の多言語表記看板

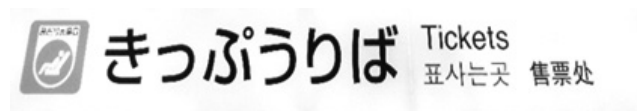


図12：大分駅の多言語表記看板



図 13：別府駅多言語表記パンフレット



図 16：別府駅韓国語表記パンフレット



図 14：別府駅英語表記パンフレット

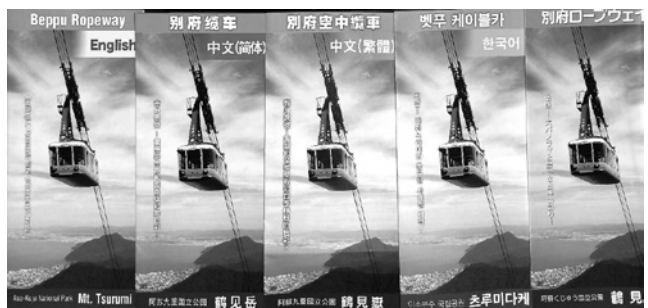


図 17：別府駅多言語（中国語簡単字・繁体字）表記パンフレット



図 15：別府駅中国語表記パンフレット

3.1.2. 三言語による表記

(1) 日・英・韓

別府地獄めぐり温泉の海地獄、カマド地獄と鬼石坊主地獄などには日本語、英語と韓国語の3カ国語で表記されている看板はあるが、図18-図20の海地獄での注意を促す看板のように中国語の表記がないものもある。

カマド地獄の料金表(図20)は日本語、英語と韓国語の表記があり、中国語の表記はなかった。中国語は漢字を使うため日本語の漢字を見ればある程度は理解することが可能であるが、すべての漢字の意味が一致しているわけではない。例えば、図20にある「高校生」は中国語では「大学の学生」を指し、「中学生」は「高校生と中学生」を指す。「小学生」は中国語でも同様に「小学生」である。このように同じ意味のものがあれば、異なる意味を示すものもあるため、誤解が生じやすいと言える。



図18と図19：多言語表記の看板

区別	大人	高校生	中学生	小学生	大人	高校生	小中学生
個人	2,000	1,350	1,000	900	550	450	250
3人以上	1,300	850	600	500	400	350	160

区別	大人	高校生	小中学生
個人	400	350	160

図20：料金表

(2) 日・中・韓

図21、図22の注意事項の表記は、「日・中・韓」で書かれているが、英語の表記が見当たらない。

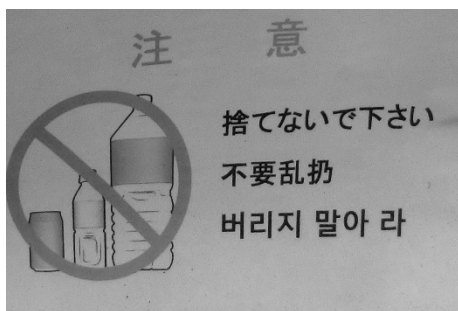


図21：注意を促す看板

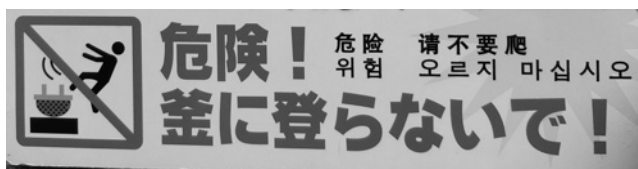


図22：カマド地獄の注意を促す看板

(3) 中・日・英

図23は観光客向けの記念スタンプの案内が「中・日・英」で表記されていることがわかる。

(4) 中・韓・英

図24は観光客向けの注意事項が「中・韓・英」で表記されている。



図23：スタンプの案内



図24：注意を促す看板

3.1.3. 二言語による表記

(1) 日本語・韓国語

以下の看板は日本語と韓国語で表記されている。図25は「芝生に入らないでください」という注意を促す看板であり、図26もトイレでの注意事項の看板である。図27は食事禁止の注意事項、図28は販売食とドリンクのメニューである。

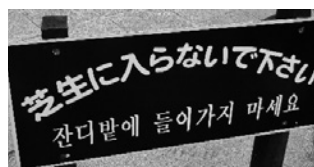


図25：注意を促す看板

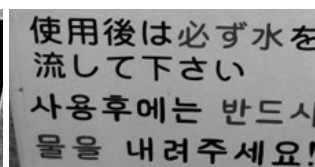


図26：注意を促す看板

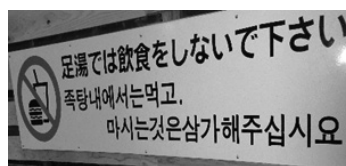


図27：注意を促す看板



図28：メニュー

(2) 英語・韓国語

白池地獄では英語と韓国語のみの看板が設置されていた。この看板には、温泉からお湯が吹き出る時は透明であるが、温度が下がると自然に白くなっていくという特性についての説明が書かれている。鬼山地獄の温泉の説明も英・韓のみがある(図29)。

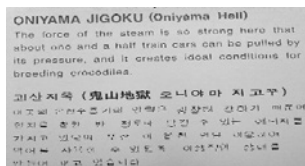


図29：鬼山地獄の説明看板

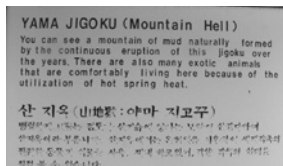


図30：地獄の説明看板

(3) 日本語と英語

鬼石坊主地獄では、図31のように危険を知らせる看板があり、日本語と英語の表記はあったが、中国語と韓国語の表記がない。中国語で立入禁止を表す場合、「禁止入内」あるいは「禁止进入」と表記する。この他、野外設置の案内掲示板には日本語と英語のみの表記も多数あることがわかった。

大分駅の案内看板にも日本語と英語の二言語のみの表記があった(図33)。



図31：鬼石坊主地獄注意事項



図32：スタンプの案内



図33：大分駅にある案内表記

(4) (日本語) 韓国語と中国語

図34のように、日本語で主な意味だけを示しておき、そして、詳細な意味を韓国語と中国語で書いていることがわかる。即ち、二言語による表示をしていると理解できる。「飲むと10歳若返るよ」という意味を表していることがわかる。

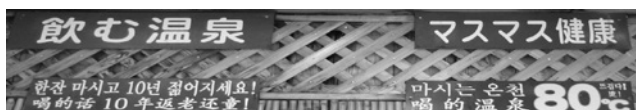


図34：飲む温泉の案内表記

3.1.4. 単一言語 (日本語) による表記

図35のように「危険注意」の看板は日本語のみのものもあるが、安全注意事項に関して日本語だけの表記も見かける(図36-図37)。それ以外、温泉の説明などの看板も日本語だけの表記があった。上述したように、場所によって多言語表記があるものとなないものが存在する。



図35：危険注意看板

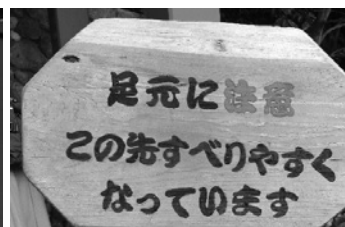


図36：安全注意看板

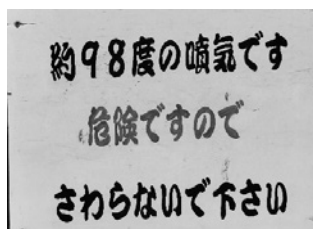


図37：安全注意看板

3.2. 表記言語の同字異義の問題

3.2.1. 日本語と中国語にある「湯 tāng」字

図38の海地獄での「足湯」のように、日本語と中国語には同じ漢字があるため、日本語がそのまま中国語として通じると考えられている可能性がある。日本では、温泉を楽しむ観光地が多くあり、「足湯」もその一つであるが、中国では、このような習慣があまりなく、また中国語では、「湯 (tāng)」はスープを意味するため、「足のスープ」という意味に取られる可能性を否定できない。したがって、中国人観光客には本来の意味が正しく伝わらないと推測される。



図38：海地獄の看板

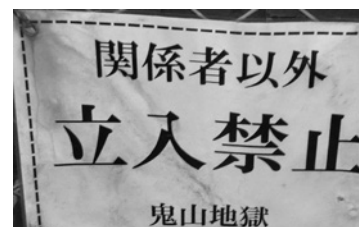


図39：注意事項の看板

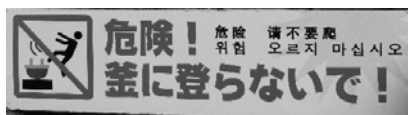


図40：カマド地獄の看板

3.2.2. 日本語と中国語にある「立入 lirù」字

図39の「立入禁止」の意味は、中国語で「闲人免进 Xián rén miǎn jìn」あるいは「禁止入内 Jìnzhǐ rù nèi」となるが、もし正しく訳さなければ、「立入 lirù」の意味は文字通りにすると、「立」漢字は「立つ」の意味を表し、中国語の「立 lì」（站立 zhàn lì）の意味になり、そして「入 rù」は「入る」の意味にそれぞれ取られることになる。「立入 lirù」はフレーズとして日本語のような「入る」の意味にはならない。したがって、単なる文字通りに中国語圏の人々に通じると考えてはいけない。このように日本語の漢字が中国語圏の人々にすべて通じるとは限らないのである。

3.3. 表記言語の誤用事例

3.3.1. 語彙的に

(1) 目的語・結果補語の欠如による誤用

日本語から中国語に翻訳する際、誤訳の事例が多く見られる。例えば、カマド地獄に図40のような標識があり、観光客に対して危険を知らせるものであるが、日本語の動詞「登る」を中国語の「爬 pá」に直訳しているが、目的語と結果補語の欠如により、意味が変わってしまい、中国語圏の人々には正しい情報が伝わりにくくなっていると言える。例えば、中国語で「请不要爬 Qǐng bú yào pá」とあるが、「爬 pá」はここでは目的語がないと意味が伝わらないのである。また、中国語の動詞の「到達点を示す」目的語と動詞の結果を示す「結果補語」の「到 dào」も欠けているため、意味的・文法的にも不自然となり、何に登ってはいけないかが不明瞭である。ここでは、日本語の「釜」が中国語の「锅 guō」にあたるが、直訳の文章にはこの目的語がない。この日本語は中国語で「请不要爬到锅上 Qǐng bú yào pá dào guō shàng」と訳するのが妥当である。

(2) 動詞の誤訳による誤用

図41・42にある中国語訳文の「動詞一目的語（VOフ

レーズ）」の「松开 sōngkai」は「緩める」という意味であり、日本語の「とけだした」を説明できていない。したがって、中国語訳文の「松开 sōngkai」を「化开 huàkai」にするのが正しいのである。



図41：カマド池の色の説明

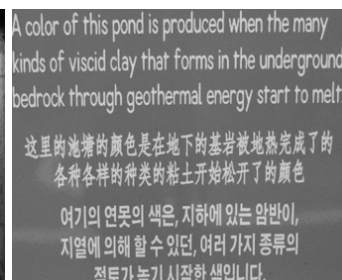


図42：図41の下の部分の拡大

3.3.2. 文法的に

(1) 受身の欠如

図43と図44の龍巻地獄の案内標識の中国語表記をみると、語彙的なミスがあることに限らず、文法的にも誤りがあることが明瞭である。例えば、まず、語彙的にみると、「间歇温泉 wèn xiē wēnquán」とあるが、「间 wèn」とは「問う、聞く」の意味を表し、日本語の「間欠泉」の意味が伝わらない。「间歇温泉 jiānxiē wēnquán」と表記すべきである。「间 jiān」は「間、一定の時間」であり、「歇 xiē」は「休む」という意味を持つ。「间歇温泉」と表記したほうが、意味がスムーズに伝わる。図43-44の中国語の正確な訳文を下記に示す。

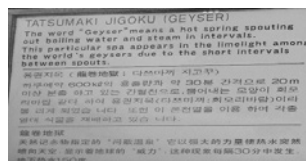


図43：龍巻地獄の案内板

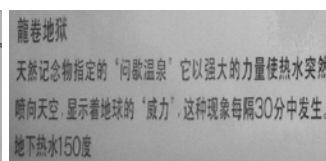


図44：龍巻地獄の中国語による案内

図43-44の正しい中国語訳文：

被指定为天然纪念的“间歇温泉”，它以强大的力量使热水突然喷向天空，显示着地球的“威力”。这种现象每隔30分中发生一次。地下热水温度为150度。

中国語訳文のピンイン表記：

Bèi zhīdìng wéi tiānrán jìniànde “jiānxiē wēnquán”，
tā yǐ qiǎngdàde lìliang shǐ rèshuǐ túrán pēn xiàng

tiānkōng, xiānshìzhe dìqiúde “wēilì”。Zhè zhōng xiànniàng měi gé 30 fēnzhōng fāshēng yíci。Dìxià rèshuǐ wēndù wéi 150 dù。

次に文法的にみると、図43と図44の中国語訳文に「天然記念物指定的」とあるが、受身の「被bèi (…为)」(…とされる)が欠けている(正解：被指定为天然纪念的…)ため、文法的な間違いが目立つことになり、結局本来の意味が正確に伝わりにくくなる。

(2) 場所を表す「前置詞」の欠如

図45をみると、日本語の「スタンプは園内中央の標本館にございます」を中国語で「图章标本馆里 túzhāng biāoběn guǎnli」と翻訳しているが、ここでは、場所を示す中国語の前置詞の「在zài」が欠けていることがわかる。「图章在标本馆里 túzhāng zài biāoběn guǎnli」のほうが本来の意味

が最も適切に伝わることになる。



図45：スタンプの案内板

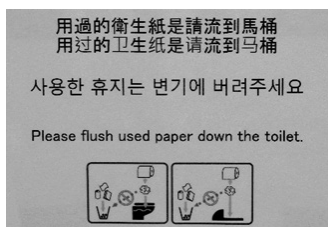


図46：トイレでの注意事項

以上のように、語彙的、文法的な誤用があることが明らかになってきた。

(3) 判断動詞「是」の誤用

図46の中国語の「用过的卫生纸是请流到马桶 Yòngguode wèishēngzhǐ shì qǐng liúdào mǎtǒng」(用過的衛生紙是請流到馬桶)と表記されているが、判断動詞「是shì」の使い方が文法的に間違っており、その意味を正しく示すことはできていない。中国語の正しい文は、「请把用过的卫生纸仍进(/到)马桶 Qǐng bǎ yòngguode wèishēngzhǐ réngjìn(/dào) mǎtǒng (垃圾桶lājītǒng)」である。「物事」を「どう処理すべきか」を示すため、中国語の「把bǎ」構文を使うのが適当である。また、「马桶」は中国

の特定地域の方言であり、標準中国語で「ゴミ箱」は「垃圾桶lājītǒng」というのである。さらに、「流liú」は自動詞であるため、日本語の他動詞である「捨てる」に相当する中国語の他動詞「仍réng」を使用すべきである。動詞「仍réng」の結果を表す「进jìn」と「到dào」のどちらを使っても良いであるが、「到dào」は「到達点」を示し、「进jìn」の場合は「結果」に重点が置かれることになる。

3.4. 不完全な訳によって生じる誤解

図47の「開けたら閉めてください」の中国語の直訳は「开了就请关上(門), Kāile jiù qǐng guānshàng(mén)」あるいは「请随手关上(門), Qǐng suíshǒu guānshàng(mén)」になるはずであるが、ここでの中国語の「请随手」(Qǐng suíshǒu)は「ついでに」という意味で表記されていることがわかる。また、下の行には、「開けたままにしないでください」という日本語の表記があり、中国語の表記は「请关门Qǐng guānmén」(ドアを閉めてください)になっている。意味的に同じであると考えてよいが、日本語の意味を中国語に直訳すると、「请不要一直开着(門), Qǐng bùyào yízhí kāizhe(mén)」になる。こうして、いずれにせよ、この二つの文は日本語を中国語に正しく翻訳したと評価しにくいところがある。初めの行の中国語の「目的語」が見当たらないため、観光客にはその意味が正しく伝わらないに違いない。こうして、当初の目的に達したとは言い切れないのである。

3.5. 重要な場所での言語表記問題

観光客にとって毎日何回も使う可能性がある「お手洗い」の多言語表記に誤用が多く見られる。例えば、図48の「トイレ」の中国語訳が「洗手xǐshǒu」となっているが、「洗手」は「手を洗う」という意味であり、「间jiān(間)」という「部屋」の意味を表す漢字が抜けているため、「トイレ」の意味が正確に伝わらないと言える。

また、図49と図50にも「马桶mǎtǒng」という単語が使用されているが、これも上述したように方言の使い分けがあるため、標準中国語の「垃圾桶lājītǒng」にしたほうがよい。



図47：血の池地獄の案内板



図48：トイレの案内



図49：トイレでの注意事項

さらに図51の「水を流してください」の訳文は「使用后, 请使水流动 Shǐyòng hòu, Qǐng shǐ shuǐ liúdòng」と表記されているが、中国語の「使」は「させる」という使役形であり、「流」は「流れる」という自動詞である。したがって、文法的に誤りがあり、意味も通じない。正しい中国語訳文は「使用后, 请冲水 Shǐyòng hòu, Qǐng chōngshuǐ」になる。



図50：トイレでの注意事項

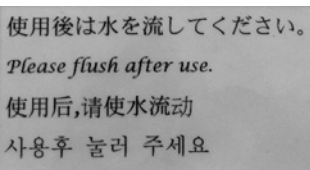


図51：トイレでの注意事項

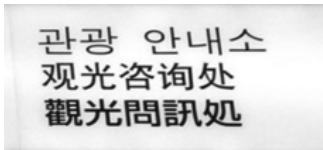


図52：簡体字と繁体字による案内

3.6. 繁体字の表記の有無

中国語には簡体字と繁体字があり、簡体字は1950年代の漢字簡略化法案の成立により中国大陸で採用され、使用されはじめたが、繁体字は台湾、香港、マカオなどの地域や中国大陸以外の中華圏で用いられている。こうして、同

じ中国語でも、地域によって使用されている文字に違いがある。日本の漢字は簡体字と繁体字のどちらも共通するところや異なるところがある。観光目的で大分県を訪れる中国人の中で、簡体字を使う中国大陸からの観光客のほかには繁体字を使う台湾、香港、マカオからの観光客が増加傾向にあることが第2節から明らかになる。

しかし、別府地獄めぐりや大分駅、別府駅の案内標識は中国語簡体字のみの表記が圧倒的に多い。大分駅構内にある観光案内所の標識(図52)や別府地獄めぐりの観光パンフレットは簡体字と繁体字の両方の表記があった(図17)が、トイレでの注意事項などは両方の表記が少なかった(図46と図50は両方で表記されているが、図49と図51は簡体字のみで表記されている)。中国大陸、台湾や香港などの中国語圏からの訪日旅行者が増加している中、中国語を簡体字と繁体字の両方で表記したほうが観光客に分かりやすく、言語サービスが行き届き、言語経済(包2015)の効果もあり、地域の活性化に繋がると考えられる。

上述したように、大分県の言語景観の実態に対する調査や考察を通じて中国語表記に多くの誤表記があることが明らかになった。こうした現状を改善し、言語サービスを向上させていくことによって、地域の活性化につなげていくことが研究者の責務であり、求められていると推測される。そこで包をはじめとし、2015年度ゼミ生にも参加してもらい、実践的な調査及び不足している中国語の表記の補足や誤りを訂正し、中国語の簡体字と繁体字によるパンフレットを作成した(2018年1月)。以下ではその具体的な内容を見ていく。

4. 地域活性化への実践活動

4.1. 中国語によるパンフレットの作成

筆者は2014年から大分の言語景観について調査を実施してきたが、2017年に大分県委託事業：地方創生大学等連携プロジェクト支援事業A 2017「学生による地域ブラッシュアップ」プログラムに応募し、支援を受け、「大分県観光地の多言語表記調査—別府市地獄めぐり温泉・その周辺と大分市中心部商店街を主として—」をテーマとし、調査を実施した。プロジェクトの実施にあたり、大分市役所景観推進室、大分市観光協会(一般社団法人)にも協力を

求め、さらに別府市観光戦略部観光課（温泉課）を通じて別府地獄組合の協力も得た。成果としてゼミ生とともに中国語のパンフレット（簡体字・繁体字）を作成した（図53）。

当プロジェクトは、主要観光地別府地獄めぐり温泉や一部商店街における看板の中国語（簡単字・繁体字）表記の改善を通して観光客に向けた言語サービスの利便性の向上を目指し、より多くの観光客の呼び込み、多言語景観の実現、観光情報の積極的発信、国際性や観光地の魅力のさらなる引き出し、地域の活性化及びまちづくりに貢献できる実践的成果を得ることを目標とした。

その成果として、ゼミ生とともに中国語（簡体字・繁体字）訳バージョンのパンフレットを作成し、そして作成したパンフレットを地域の活性化のために、上記各機関や大学関係者に贈呈した。この「観光客用小冊」（パンフレット）では「別府地獄めぐり」温泉について中国語（簡単字・繁体字）での紹介や、鬼山地獄の温泉や「龍巻地獄温泉」（図53）の全体の説明など観光客に必要な情報が多く取り入れられている。



図53：作成したパンフレットの内容⁷

4.2. 公共機関における多言語誤表記の改善

福岡の博多駅バスターミナルには、空港行きの国際線があり、外国人観光客が多く利用している。また、对外窓口

の一つにもなっている。図54－図57のように博多駅バスターミナルの乗車口には日・英・韓・中の多言語表記が見られる。筆者は2018年2月26日と3月23日にこのバスターミナルを利用した際、多言語（中国語を含む）表記に誤りがあることに気づいた（図54、図56）。3月に利用した際、現場にバス案内役の従業員がちょうどいたため、中国語表記の誤りの改善を提案した。そして2018年8月8日にバスターミナルを再度利用する際、図55のように中国語の誤りが訂正され、英語と韓国語も改善されていた。

図54のような多言語のあやまりは外国人観光客にとって意味が通じにくく、それを改善しなければならないと考えられる。例えば、図54は日本語の「ご乗車の際はこのボタンを押すとドアが開きます。」を中国語で「乗車時候，這個按按鈕和門張開Chéngchē shíhòu, zhègè àn ànniǔ hé mén zhāngkāi」になっていた。正しい中国語は図55のように「乗車時按此按鈕，門會自動打開Chéngchē shí àn cǐ ànniǔ, mén huì zìdòng dǎkāi」になるべきである。ここでは、語彙的・文法的なミスがみられた。中国語の「と」の意味を示す「和」の誤用と中国語の二音節動詞「張開zhāngkāi」の誤用が認められる。「張開」は、「口をあけて」の意味を示すときに「張開口zhāngkāi kǒu」と使用されるが、「ドアが開く」ときに用いられないため、語用に問題が出て中国語圏の母語話者に不自然に感じられてしまうのである。

以上のような実践活動を通して、言語景観が改善され、英語、中国語と韓国（朝鮮）語などを利用する外国人観光客に便宜を図り、言語サービスの向上に繋がり、地域の活性化にも役に立つと考えられる。こうした地域のための活動は、研究者にも問われる問題であり、地域の活性化のために今後も貢献していくことが必要である。



図54：博多バスターミナル福岡空港行き国際線乗車口の多言語景観（2018年2月26日撮影）

7 当ページのデザインはゼミ生の井口真穂が担当。



図55：博多バスターミナル福岡空港行き国際線乗車口の多言語景観
(2018年8月8日撮影)



図56：博多バスターミナル福岡空港行き国際線乗車口の
多言語景観 (2018年3月23日撮影)



図57：博多バスターミナル福岡空港行き国際線乗車口の
多言語景観 (2018年8月30日撮影)

5. おわりに

大分県の観光地別府地獄めぐり温泉、別府駅と大分駅周辺エリアの言語景観を調査することによって、その周辺地域の案内標識や案内板の言語表記の実態を明らかにすることができた。観光地として、日、英、韓、中の四言語や日、英、韓（日、英、中；日、韓、中など）の三言語及び二言語表記（日、英；日、韓；中、韓など）、単言語（日本語）表記などの種類があることもわかった。第2章で取り上げたように、近年の観光客の増加により、中国語の表記が以前より増えたものの、まだ十分とは言えない状態にあることが明らかになった。さらに、案内板の中国語に誤りがあり、

中国語語彙の選択、動詞の使い方や文法的なミスなどの問題が起きていることが明らかになってきた。こうして漢字圏の観光客に正しい情報が伝わらない可能性もあるという問題点が浮上してきた。また、同じ漢字圏とは言え、中国語の漢字と日本語の漢字の意味がすべて一致しておらず、日本語の漢字で中国語の漢字をすべて代用することができないため、誤解を招く恐れも生じていることがわかった。さらに、中国大陆、香港と台湾などの地域では簡体字と繁体字を使い分けているため、より正確な情報を伝えるためには、簡体字と繁体字の両方を使用して表記したほうが最も効果的であると考えられる。

本研究は多言語景観を調べることを通して、大分県の主要観光地における言語景観の実態を明らかにすることに止まらず、多言語表記における誤字・脱字・間違った翻訳表記などを発見し、言語景観改善の提案を行い、中国語訳がないところに訳文を提供し、地域の活性化や多言語景観の実現に繋げることができたと言える。今後も引き続き地域に着目し、改善点の発見と提案及び実践活動を通して多言語・多文化共生幸福な社会作りに貢献できるように取り組んでいきたい。

参考文献 (Alphabetical)

- 包聯群 2015 「経済言語学の視点からみる言語景観——アメリカのチャイナタウンと日本の中華街の比較」、『大分大学 経済論集』(第67巻 第5号)、85-116頁。大分大学経済学会。
- ダニエル・ロング (Long) 2011 「世界の少数言語の言語景観に見られるアイデンティティの主張」、『世界の言語景観 日本の言語景観 景色のなかのこぼれ』。3-12頁。富山：桂書房。
- 井上史雄 2009 「経済言語学からみた言語景観」、『日本の言語景観』。三元社。53-77頁。
- 井上史雄 2011 「日本語景観の地理と歴史にみる言語接触 戦前・戦後の日本語領域」、『多言語社会の日本語教育に関する社会言語学的総合研究』(山下暁美編)。1-10頁。
- 井上史雄 2011 『経済言語学論考一言語・方言・敬語の値打ち一』。東京：明治書院。
- 井上史雄、包聯群 2015 「内蒙古文字景観の社会言語学—文字の社会類型論—」、『社会言語学』。社会言語学刊行会。91-111頁。
- 正井泰夫 1969 「言語別・文字別にみた新宿における諸設営物の名称と看板広告」、『史苑』(29-2)。166-177頁。

中井精一/ダニエル・ロング/内山純蔵2011『世界の言語景観
日本の言語景観 景色のなかのことば』。富山：桂書房。

庄司博史/P・バックハウス/F・クルマス2009『日本の言語景
観』。東京：三元社。

Backhaus, Peter 2007 *Linguistic Landscapes* (Multilingual
Matters).

Bourhis, R.Y. and Landry, R. 1997 'Linguistic landscape and
ethnolinguistic vitality: an empirical study', *Journal of
Language and Social Psychology* 16: 23-49.

謝辞

当論文の執筆や調査の一部にあたり、大分県委託事業：地
方創生大学等連携プロジェクト支援事業A「「学生におけ
る地域ブラッシュアップ」プログラム2017」のご支援を受
けたこと、そして2017年の調査を実施する際に、ご支援
を下された大分市商工労働観光部・観光課と別府市観光
戦略部・観光課及び別府地獄組合の皆様にご深くお礼を申
し上げます。また、2015年のゼミ生の皆様による別府地
獄めぐり温泉のパンフレットの作成に感謝する。最後に、
日本語のチェックをしてくださった中篠雫氏にも感謝の意
を示したい。